

長野県革新懇ニュース

2018年1月号
発行日1月10日
会費 2,000円
購読料 3,000円(送料込)
振替 0510-3-15971

224

発行 日本と信州の明日をひらく 県民懇話会
(長野県革新懇) 発行人: 山口光昭 編集長: 高村裕
〒380-8790 長野市県町593 高校教育会館内
TEL: 026-234-1231 FAX: 026-234-2219 メール: mail@nagano-kakushinkon.com

====今号の主な記事====

- 1面 降旗康男さんインタビュー
- 2面 1面続き、近現代信州の歴史回廊
- 3面 大北森林組合補助金不正裁判提訴 福島を風化させてはいけない
- 4面 随筆「ふるさととは・・・」堀井正子さん
映画評論「米軍が最も恐れた男 その名はカメジロー」
読者のこえ・各地の動き、漢字パズル

長野県革新懇

検索



1,934年松本生まれ。
松本深志高校、東京大学文学部フランス文学科卒業後、1957年東映入社。1978年に東映を退社しフリーとなり、1999年、『鉄道員(ぽっぽや)』で日本アカデミー賞監督賞・脚本賞を受賞。2008年旭日小綬章受章。2017年信毎賞受賞。80歳を越えた現在もなお、映画界の第一線で活動をしている。

バラバラなものが一つになる それが映画づくりの魅力

ふるはた やすお さん
降旗 康男 さん
(映画監督)

映画を続けてきたのは
何より水が合ったから

Q まずは、映画界に入られた
きっかけをお聞かせ下さい。

大学を卒業したら、研究室に残ってそのまま文学の研究などをしようかなあとか、外国へ行ってみようかなあとか漠然と思っていました。なかなか狭き門だということがありまして、11月頃、文学部から就職できる場所はどこかを探そうということになったので、学校の掲示板を見に行きました。すると、何とその後世の中の変遷の中では信じられない話ですが、文学部の求人広告の中で、映画会社の給料が結構よかったですね。岩波書店や有斐閣などの出版社が上位でしたが、その次に東映、東宝があったので

す。それでなんとなく給料が何番目ということに惹かれまして、自分としても映画会社の水が合っているのかなという期待もあり、この道に入ることにしました。

Q ときには辞めようと思うようなこともありましたが、やっているうちにもう他にやってもこれほどの暮らしの良い所はないんじゃないかというふうなこともあって、本当に水に合っているところに来たなあと思うようになりました。まあいい加減なところが一番水があつたんだろうと思います(笑)。

その頃の映画界は一掴みの正社員と臨時の撮影所員で映画を作っていました。今でも忘れませんが、僕らの初任給は1万3800円で、正社員でない臨時の人たちの月給は7、8千円でした。そんな給料でなぜ毎晩お酒を飲んで暮らせたかという、時間外の賃金ですね。時間外労働が深夜になる、零時を超えて次の日になる、それにつれてどんどんパーセンテージが上がっていくわけです。僕なんか入社直後でしたが、どこでも時間外が多くて、6万円とか7万円が入ってきました。1万円札がまだない頃で、千円札なものですから給料袋をポンと叩くと封筒が横にも縦にも立ったもんです(笑)。

臨時の人でも、やっぱり3万円とか4万円とかになりました。その当時のサラリーマンでは、部長さんとかにならないうちで3万円、4万円を得ることはできませんでした。ところが、経営側としては、そんなのいつまでも認められないというので、三井三池闘争の直後だったものです

ら、そこで資本側の隊員として戦い慣れた人たちが皆売り込んできて、東映に悪知恵を仕込んで、労使対立を煽ってきたんです。そこで、ストライキとか時間外拒否とかいろいろやりましたね。ストライキでピケ張って、もみ合いになっても手は上げるな、とかね。腰下で写真に写らない所で蹴飛ばすのはいいけれど、手を上げて殴ったら写真に撮られて暴力行為ということになるから、それは絶対止めるんだということを真剣に討論したものです。そんな時代になっちゃったものだから。

映画から早く足を洗って、テレビの方で自由な仕事をしたらかどうかと勧められる人もいたんですが、大事なときに逃げ出すのはかっこ悪いじゃないかという思いもあり、残ったということもあります(笑)。それ以後、本当に水が合ったということが何よりで、83歳になるまでずっとお世話になっちゃったということですかね。

個人的には水が合ったんだけど、会社側の考えと僕らの思いがうまくいかなかったり、なかなかなかったのかなと思います。東映の場合、富司純子さんのお父さんの俊藤浩滋さんがプロデューサーをやっていた間は、人徳とい

うか、人を遇するのがうまくいったといおうか、うまくいったような気がするんですが、俊藤さんの重みが東映の中でだんだん減ってくるようになる、どうしても東映の方針と合わないということになってしまい、4年間か5年間程テレビ映画を撮っていたことがあるんですよ。それがいるんな偶重なるって、高倉健さん主演の「冬の華」で、また東映に復帰することになりました。高倉健さんと一緒に仕事が出来たという映画「冬の華」が、僕の人生ではひとつのメルクマールだったという意味で、忘れたいし、好きな作品ですね。高倉さんと一緒にやるときは、できるだけ高倉さんと演技を競い合う方を選んで周りを固めるようにしました。その方が、高倉さんの個性もさらに発揮できると思ったからです。その意味で、「冬の華」での高倉さんのセリフには深みがあって、高倉さんにとってもターニングポイントになった作品だと思っています。

メルクマールとなった 映画「冬の華」

Q 多くの作品を撮られていますが、特に印象に残っている作品、あるいは裏話をお話しいただけたらと思います。

こうしてくれ、ああしてくれと言って簡単にできるものなら苦労はしないのですが、誰々さんに出演していただくようになったら、その俳優さん、一番いいところが発揮できるような下ごしらえをして演技の火花を散らしていただく舞

台を作ることが僕らの仕事として一番大事なのじゃないかと思えます。僕の思惑どおりにやっていると、観る人にそれが伝わるかというところをわからない。わからないところをわからせるように作るのが僕らの仕事なのかなと思っています。

Q 俳優さんに対する思い、映画製作の思いについてはいかがでしょうか。

1人の思い、1人の感覚だけをもとにして作る映画というのも1つの形としてはあるでしょう。例えば俳優さんであれば、監督が作ったモデルに俳優さんが自分の血を流し入れればいいんだということだと思いません。でも、僕とすれば順番が逆で、例えばスタッフの助手さんから主演俳優さんまで皆作品の脚本から得た自分のやることをそれぞれの人と考えて、最初はもやもやでも、撮影の本番、音入れなどを積み重ねて完成させていくという、バラバラのものが一本のフィルムにまとめられていくというのが映画の面白さだと思います。監督が自分のこれだというものを皆に徹底して作っていくという形もあります。それを両極として考えるなら、皆バラバラなもの、最後に一本のフィルムをもった映画になっていく方が僕は好きです。僕の映画はそういうものであって、1人の思いの中にだけいろいろなことを詰め込んでいくというのには僕にとっては抵抗のある作り方かなと思います。映画を作るといって教科書を出すとして、「どっちが正しいのですか」といわれるとどっちも正しい作り方だと思えますが、僕にとっては、集まった人、その人にとっての具体的なことがだんだんに一本の

【2面に続く】